
心の『修復』賜わります！

A-R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の『修復』賜われます！

【Nコード】

N8690G

【作者名】

A-R

【あらすじ】

中学生の直己と葵は母のお腹にいる時からの幼馴染。二人は人の心の穴を『修復』できる特殊な能力の持ち主。特に直己は人の心を取り出せるという能力を持っている。二人はインターネット上に広告を出し、その能力を使って一回千円で心の『修復』を請け負っている。ある日、二人の担任である金田聡からの依頼が舞い込む。依頼内容は息子・毅の心を修復することだった。

「これはこれは……」

僕は取り出した心を見て思わず声を失った。

僕の反応を見て葵が急いで、動かない三十代くらいの男の身体を無造作にまたぎこしてやってきた。死んでいるわけではないが足元に横たわる男はピクリとも動かない。この男は僕の住む三 三号室と、葵の住む三 一号室の間の部屋、つまり三 二号室の住民だ。確か名前は山中さんだったと思う。

「おー、こいつはスゴイねえ」

僕の手の中にある球を覗き込んで、葵はどことなく嬉しそうに言った。

「確かにすごいね」

僕も自分の手の中にある、それを見てある種の感動を覚えた。ところどころ虫に食われたように穴が開いている。その穴の開き方が絶妙で見ようによってはきれいだと言えなくもない。

しかしこれが人の心だと考えると笑うに笑えない。

「こりゃあウツにもなるよね」

「何があつたのか知らないけど、ナンマンガブ、ナンマンガブ」

「死んでないって」

手を合わせる葵に僕は苦笑した。

「ナオがこの人は放っておくと自殺するかもって言ったのは正しそうですね」

「これを治すのって結構難しそうだよな？ 葵に出来る？」

僕は心配になって尋ねた。これは人の心なのだ。下手をすると廃人になってしまう。

「まっかせなさい。この葵さんに埋められない穴はないのだよ」

僕の心配をよそに葵は自分の胸を力強く叩いてみせた。でも少し力を入れすぎたらしく思い切り咳き込んだ。

「何やってんだよ」

僕は葵の背中をさすった。

何気なく行ったことだったけれど、僕は葵の背中の華奢さにドキリとする。

「失敗、失敗。でも大丈夫。こっちの作業のほうはしくじらないよ」
くりんと目を回して葵は不敵に笑った。

「頼みますよ、先生」

本当に大丈夫かなと思ったが僕は冗談めかして頼んで、葵の手に山中さんの心をそつと手渡した。

「うむ。任しんしゃい」

僕から心を受け取ると、葵は今までの陽気な表情を消して、じつと山中さんの心を見つめた。

「元気になろう」

葵が『修復作業』に入る前の口癖を囁いた。

ここから先、しばらくは僕のする仕事はない。ぼおつと葵の仕事を
見ているしかない。

仕事といっても、何か作業をするわけではない。穴の開いている
部分に音楽を注ぎ込み、そこを塞ぐイメージでゆっくりと音楽を口
ずさむだけだ。音楽は何でもいい。その時に思いついた曲を口ずさ
む。葵の歌は絶品だ。繊細で、慈雨のように降り注ぐ。聞いていて
心地いい。音楽の成績が二だとはとても信じられない。ちなみに僕
の成績は五だ。

（依頼、入ってるかなあ……）

今回のケースは完全なる無償行為だが、実は僕たちはこれで小遣
い稼ぎをしている。もちろん、親には内緒だ。大体、僕が人の心を
取り出せるんだと告白したところで頭の心配をされるだけだろう。

ともかくインターネットに広告を出して、僕たちの家の周りに限
って一回千円で請け負っている。稼ぎは折半だ。盛況とはいえない
が、一ヶ月に二件くらいはあるから千円くらいの小遣いにはなる。

（依頼が入っていると、ちょっと困るなあ。そろそろ中間だから勉

強くないといけないし)

中学生の辛いところだ。休業にすればいいのだが、僕たちは受験生で、次に依頼が来たらそれで一旦やめにしようといっているのだ。葵の成績は目を覆うものがあるので、なるべく早く依頼をこなして葵が勉強に没頭できる環境にしてやりたかった。

そもそも葵と僕がこの仕事を始めたのは二年二ヶ月前、中学に入ってからだ。でもこの『修復作業』自体はもつと前から行っていた。いつからだったかはよく覚えていない。

偶然にしてはできすぎだと思うのだが、僕が母のお腹の中にいた頃、新しい家族(つまり僕だ)が増えるからというのでこのマンシヨンに引っ越してきた。引っ越しのご挨拶に伺ったら、たまたまそこに親友が住んでいたということらしい。しかも葵のお母さんのお腹の中にも赤ちゃん(つまり葵)がいた。母親同士が仲がよいということで葵と僕はどちらの子というのは全く関係なく育てられた。僕たちにしてみれば両親が二組いるような感覚だ。

今にして思えば本当にそれで良かったと思う。もしもそうでなければ今の僕はここにいないと思う。色々な意味で。

「終わった〜！」

葵の元気のいい声がして、僕は思考を打ち切られた。

「よかった。できはいかがかな？」

「ふふん、完璧」

さすが私と騒ぐ葵から心を受け取って僕は出来を検分した。
「なるほど……。完璧ですな、先生」

穴の部分に金色に光るもので塞がれている。修復されたところが何色になるかは人それぞれだ。ピンク色の人もいれば、青い人もいる。オレンジの人もいるし、人によっては穴ごとに違う色が詰まっていることもある。

「きれいだね」

「目が覚めたら、びっくりだね。自分の心の中に希望が湧きあがってくるんだもん」

ふふと葵が嬉しそうに笑った。

「いいことじゃない」

「だよ。一日一善を着実にこなしてるよね、私たち」

うんうんと葵は満足げに頷く。

「じゃ、山中さんに心を戻すよ」

「らじゃ」

葵が親指を立てた。

「人生、悪いことだけじゃないらしいですよ」

僕は山中さんの身体のそばに膝をついて、心にそうささやいて心臓の辺りにそっと心を置いた。ゆっくりと球が胸の中に消えていく。ちゃんと入りきるのを見届けてから、僕は山中さんの耳元にささやく。

「僕たちが出て行つてから、目を覚ましてください」

「それより早く、目え開けないでね」

「さあ、さっさと出るよ」

僕は立ち上がった葵を促した。

「だね。ちょうど四時だよ、今日はママがケーキを作るって言つてたからお八つはきつとケーキだ」

「忘れ物は？」

うきうきする葵に、僕は確認した。

「な〜い。鞆オッケー」

「これは何だい、葵さん？」

オッケーという葵の目の前に、僕は手に持ったビニール製のバツクを突きつけた。

「お〜、それはまさしく私のプールセット」

「『それはまさしく私のプールセット』、じゃないだろ。ちゃんと確認しろって言つたろ」

「まあまあ、そうカッコしないで。ナオが気づいたんならいいじゃ

ん？」

「よくない」

「はっはっは。さ、早く行こ。ケーキが呼んでる」

僕にプールのバッグを持たせたまま、葵は踊るような足取りで玄関へと向かった。

「あ、ちよつと、僕にもたせたまま行つちやうのかよ？」

僕は慌てて葵の後を追った。彼女はびっくりするくらい身長が高いので追いつこうとすると、チビな僕は小走りしないといけないのだ。

「レディーのかばんを持つのは当然のことじゃないかな、直己なおきクン？」

玄関でローファーをはきながら、葵は笑って言った。

僕も玄関で靴を履き、外に人がいないか全身の神経を研ぎ澄まして人がいないことを確かめて、ドアをそつと開けた。目でもう一度回りに人がいないことを確認して、僕たちは外へと滑り出した。そうしてから僕は思い切り鼻を鳴らした。

「レディー」

もう一度大きく鼻を鳴らす。

「レディーというのは人が楽しみに最後に取っておいたデザートを

『お、うまそう』とか言っつかつさらうものなのか？」

「それはひどいなあ」

葵が顔をしかめる。

「レディーというのは、『かゆいなあ』とか言っつて男性の前でワイシャツに手を突っ込んで胸をぼりぼりかくのか？」

「そんな奴、いるの？」

葵が目を丸くする。

「レディーというのは、教室の入り口にチョークが沢山ついた黒板消しをドアに挟んで、引つかかった奴を見て手を叩いて喜ぶ奴を言うのか？」

「なんて奴だ！ そんなのレディーとは言いがたいねえ」

「全部お前だ、葵」

「へ？ 何ておっしゃった？」

「お前の過去の悪行を並べ立てたんだよ、僕は」

「おー、ワタシ、そんなの全然記憶にアリマセーン。無実デース、濡れ衣デース」

怪しげな日本語をしゃべって無罪を主張しながら、葵は山中さんの隣の家のドアの前で立ち止まってかばんから鍵を取り出した。ネームプレートには「三三 滝沢」と書かれている。ここが葵の家だ。

かちつという鍵の開く音がして、葵がドアを引つ張り開けると僕たちの鼻腔を甘いケーキの香りがくすぐる。なるほど今日のお八つはケーキのようだ。

「たっだいま！」

嬉しそうに鼻を動かしてから、葵は元気よくポイポイと葵が靴を脱ぎ捨てて家の中にあがった。僕はそれをきちんとそろえて、自分の靴もそろえて家上がった。ついでに施錠もする。

「お邪魔します」

「お帰りー、二人とも！」

明るい声が出て突き当たりの部屋から葵の母親の弥生さんがひよっこりと顔を出した。弥生さんは優しい雰囲気をもった女性だ。ふわふわの髪の毛を一つにまとめ、家事をこなしていて、いつもニコニコしている。母親というと僕は自分の母よりも弥生さんを想像する。料理が上手な働き者で、その上、可愛くて美しい。弥生さんは恥ずかしながら僕の理想の女性だ。弥生さんと結婚できないと理解した日は涙が止まらなかった。

（それにしても……）

どうしてその娘はこうなんだろうかと僕は葵を横目で盗み見た。

男勝りで喧嘩はするわ、いたずらはするは、まるで悪がきの権化だ。まあ、瞳のくりくりした美人である点だけはしっかり遺伝しているが。

「ちょうどよかった。もう少しでお八つよ。今日はケーキ
「やったあ」

葵が無邪気な顔で快哉をあげる。

「おっと！ 葵は太るから、あんたはお煎餅にしときなさい」
「ええ！」

葵は目じりを下げて本当に悲しそうな顔をする。

「ね、ナオ君。この子がこれ以上太ったら、隣りなんか歩きたくな
いわよね」

怨念をこめた視線をびんびんに感じながら、僕は肩をすくめた。

「別に。大体、葵はそんなに太ってませんよ」

「そうかしら……」

心配そうにする弥生さんに、僕は力づけるように頷いた。

「大丈夫です。栄養をやっても、横には伸びずに上に伸びますよ」

「それは……。もつと嫌かも」

ちよつと意外な反応だ。

「わたし、娘は小さいほうがいいな。大きいと可愛くないじゃない」
「……」

葵が無言のまま僕のそばに戻ってきてむこつずねを蹴飛ばす。

「とにかく、ケーキをくれないとグレてやる！」

弥生さんにそう叫ぶと、葵は僕を自分の部屋に引つ張り込んだ。

葵の部屋は本人の意思に反してピンクに支配されている。ピンクの壁紙、ピンクのベッドカバー、ピンクのカーテン…全てがピンク色だ。ベッドの上には弥生さんお手製のビッグなクマのぬいぐるみが置かれている。

「つたく、余計なこと、言わないでよね！」

ぶつくさいう葵に、にこりと笑ってから、僕は部屋の奥にある机のところに行ってノートパソコンの電源を入れた。

「依頼、入ってるかな」

「さあね。葵、着替えるだろ？」

「え、あ、うん」

頷くのを見て、僕は部屋の入り口に戻った。

「外で待ってるから」

入り口で一回、振り返って僕は葵にそう告げた。

「いつも思っただけど、別にいてもいいよ？ 着替えるだけだし」

キョトンとする葵に、僕は苦笑した。葵にはまだ子どもなどころがある。

「それは、さすがにマズいでしょ」

「そうなの？」

「そうだよ」

力強く言って、後ろ手でドアを閉める。

葵が出てくるまでに一つでも単語を覚えようとかばんから単語帳を引っ張り出すと、ひらりと封筒が舞い落ちる。

「またか……」

やれやれとため息をついて、僕はそれを拾い上げた。

封筒の口の部分にハートの形のシールが張ってある。俗に言うラブレターというやつだ。

以前からもらっていたのだが、半年前から頻繁にもらうようになつた。別に悪い気はしないが、もらっても嬉しくない。僕がラブレターをもらっているのを見ると、なぜか葵の機嫌が悪くなって僕に当たってくるという弊害を生み出すからだ。機嫌が悪くなるのはきつと自分がもらったことがないから、妬んでいるだけだろうけど。

「あらま、ナオ君。またラブレターをもらったの？」

お盆を持った弥生さんがにこりと笑って、僕がかばんの中にラブレターを押し込むのを見つめていた。

「はあ、そのようです。単語帳に挟まっていました」

どうやら弥生さんは娘がくれることを恐れたらしく、お盆の上にはケーキが二つ乗っかっていた。

お盆を受け取ると、弥生さんが目を細めて僕を見つめていた。

「ナオ君はカッコいいからねえ」

弥生さんは、くしゃりと僕の髪の毛をかき回すように撫ぜた。

「そんなことないと思うけど。だって身長、低いし。メガネ君だし」
「身長なんかもう二年もすればによきによき伸びるわ。大体ナオ君がかけてるの、伊達メガネでしょ？」

そうなのだ。僕がかけているのは、度数の入っていないただの玩具なのだ。僕がメガネをかけたしたのは、例によって葵の発言のせいだった。今でもあの暴言をはつきりと思い出せる。

あいつは五年前の五月二十一日午後二時四十分二十三秒に、僕の顔をじつと見つめてこう言った。

『ナオつてさ、悪人面だよね』

ピュアな僕はその言葉に心から傷ついたのだった。どれくらい傷ついたかというとその日から顔を上げて外が歩けなくなった。そのせいで交通事故に遭いそうになって、母さんは僕を眼鏡屋に連れて行って伊達メガネを作ってくれたのだった。これさえあれば顔はよく分からなくなるから、大手を振るって顔を上げて大丈夫と諭されたのを覚えている。

「もう数年したら世界中の女が放っておかないわね」

それは大げさというモンですよ、弥生さん。僕は所詮、悪人面なんですから。

しかし僕はその言葉を彼女の慰めとして、素直に受け取った。

「どうも。そうなる日が来ることを願ってます」

「ナオ君。女は見た目じゃないからね」

ちよいちよいと僕の眼鏡を触って弥生さんが微笑んだ。

「はあ」

「お待たせ！」

勢いよく扉が開いてジーンズにシャツという、色気の欠片もない格好で葵が出現した。何でそんなに慌てててきたのか、ポニーテールが左右に大きく揺れている。

「ママ、これから私たちは中間テストのおベンキョーをするの。だ

から邪魔しないでよ」

僕を部屋の中に押し込みながら、葵がどことなくツンとした声で言った。

「はいはい。しっかりお勉強してね」

笑いをこらえた声でそう言って、弥生さんはキッチンに戻っていた。

「おベンキョーねえ。何で葵が言うつと嘘っぱく聞こえるんだろうな」
パソコンに向かいながら僕がそう言うと、葵は信じられないような暴挙に出た。

「失礼な！」

手で二つのケーキをつかみ、一つ目を半分くらいまでパクリと口の中に入れた。

「おい！」

啞然とする僕を尻目に、葵はあつという間に一つ目を平らげた。

「おいふい〜」

二つ目を半分まで口に入れたところで、僕は驚きという金縛りから解けて大慌てで葵の手をつかんで引き寄せた。

「ばか、それは僕の方だ！」

「知ったこつしやない！」

葵の手からケーキを奪い取ることは断念して、僕は葵の手を無理やり口まで引き寄せて、残りの半分を口の中に入れることに成功した。

「ああ！ あらしのケーキ&#8252;」

口をいっぱいにしたままで、葵が地団駄を踏んだ。

「ふざけんな、一つは僕のだろ！」

ずずつと紅茶を啜りながら、僕は腹を立てたままパソコンをネットに接続する。食い物の恨みは根深いのだ。しかも弥生さんお手製のケーキだぞ、畜生め。

「おベンキョーにはブドウ糖が必要って習ったの！ いいじゃない。ナオはオール五でこれ以上のブドウ糖はいらないよ」

唇を尖らせる葵に、僕は鼻を鳴らした。

「僕は毎回ものすごく努力をしています」

「何よ、私なんか逆立ちしたってオール五なんて無理！」

「いや、葵の場合、取る気もないだろ？」

「まあ、そうだけど」

「あ……」

僕はパソコンの画面を見て、軽く声をあげた。

「どうしたの？」

「依頼だ……」

「……」

葵も指についたクリームをなめながら画面を眺めた。

「依頼主の住所、ここから近いね」

「うん。っていうか……」

画面をスクロールさせ依頼主を表示させて、僕らは顔を見合わせた。

「これって、担任じゃない？」

「担任だね」

間違いなかった。確かに御依頼主のそこには金田聡と書いてあったし、僕の覚えている先生の住所と、この画面に書き込まれている住所に相違点はない。

「依頼内容は……。子どものおかしく、自殺しないか心配です」

葵が眉根を寄せてさらに読み進める。

「何かに悩んでいるようで、表情も暗いので心配しています」

参考までにと添付されている写真を見ながら僕は苦笑した。

息子、毅はまさに父親そっくりで、面長な顔に神経質そうな顔をしている。

「キンちゃんってばいつも渋い顔をして、人生は自分で切り拓くんだとか言ってるのに」

「どうしたんだろうね。こんなバカ親っぽいこと書かないタイプっ

「ぼいのに」

金田は非常に真面目な社会科の教師だった。面白みのない、たんと指導要領に沿って授業をするタイプで生徒にはあまり好かれていなかったが、僕は結構好きだった。地味にサラリーマンしてるんだなと感じるからだ。

「そういえば、いつだったか、キンちゃん家の息子が夜中に外をほつつき歩いてるって誰かが言ってたよ」

「本当に？」

そんな噂は聞いたこともない。ガセネタかも知れない。

「本当かどうかは分からないけど、あながちウソじゃないかも」

「何でそう思うの？」

僕は葵の顔を見上げた。

「ん、だってさ、キンちゃんってばこの間、奥さんと離婚したじゃん」

「え、そうなの？」

「覚えてないの？」

「うん、記憶にない」

「おかしいね、しばらくクラス中で噂になっていたのに。ナオは聞いたことを忘れることなんか絶対はないのに」

唇に親指を当てて葵は考え込んだ。

「あ、そっか。その時ナオはインフルエンザで学校、休んでた」

「ってことは三ヶ月くらい前か……」

「そうそう、それくらい前かな。寒かった記憶があるから」

「ふーん、珍しいね。息子をキンちゃんが引き取ったの？」

普通は母親が多いと聞いていたので、僕は少し驚いた。大体、あの地味で冴えない金田が息子を引き取るような気概があったこと自体が驚きだった。

「ま・さ・か」

葵が力をこめて否定する。

「息子、高校三年生なんだって。だから奥さん、息子が卒業するま

でこの近所に部屋を借りたみたい」

「なるほど。確かに今の時期に転校するより、そっちのがいいね」

「でもいい選択だったのかな。噂によるとキンちゃんの不倫が離婚の原因らしいよ。近所に不倫した自分の父親がいたら私は嫌だな」

「え、ふ、不倫？」

僕は目を丸くした。あの金田が！世の中ってわからないものだ。

「ほほう、この件に関しては完全に私のほうがナオよりも先を行ってるんだね」

気持ちいい、優越感と騒ぐ葵に先を促す。

「他には？何か知らない？」

「他？知らない」

くるんと瞳を動かして、葵は残念そうにそういった。

「そっか」

「何、難しい顔なんかしちゃって」

「ん、今回の仕事は、ちょっとメンド臭いかもしれない」

「受けないとか言わないよね？」

心配そうな顔で葵が僕の顔を覗き込んだ。

その顔に僕はにやりと笑って見せた。

「もちろん」

「そうこなくっちゃ！」

葵が嬉しそうに手を叩いた。

「さ、じゃあ、決まったところで勉強しよう」

「ええ！？下見に行こうよ」

悲壮な声をあげる葵に僕は穏やかに微笑んで見せた。

「葵。中間でひどい点を取って傷心のキンちゃんの心に塩をすり込むようなことをしちゃいけないよ」

「え、でも」

「千六百年」

僕の問いに葵が笑顔で即答した。

「文明開化！」

「さ、勉強するぞ」

「違うの？ ペリー来航だっけ？」

「アホ」

+++

弥生さんに頂いたおすそ分けを手に、『三一 静』という表札の出ている自分の家に帰ったのは結局七時ごろだった。

家に帰ると、リビングに電気がついていて、すっかり飽きてしまった料理のおいがして、僕はゲツソリとした。空腹感を覚えていた胃が急に満腹感を訴える。

「ただいま」

「お帰り」

キッチンから、似合わないエプロンをつけて父さんが顔を出した。極めて珍しい。最近は毎日午前様なのに。

「今日は早かったんだね」

「そうなんだ。だからカレーでも作ろうと思って」

「また？」

僕はそうとう疲れた顔をしたが、父さんは意に介さない様子で胸を張った。

「だってカレーしか作れないんだ。仕方がない」

「……」

父さんは偉い、のかもしれない。一応、息子に手料理を食べさせてやりたくて頑張っているんだと思う。二年半前からちつとも進歩していないけど。

「もうすぐできるから、手を洗ってこいよ」

「うん」

部屋に引っ込んで着替えながら僕は返事をした。

僕に母さんはいない。二年半前に殺されてしまったからだ。バリのキャリアアウーマンだった母さんは商談を成立させて、ウキウキしながら家に帰ってくる途中で突然、刃物で刺された。刺された

場所はマンションの入り口で、犯人はまだ捕まっていない。分かっているのは入り口に設置されている防犯カメラから、犯人は少年であるだろうということだけだった。

まぶたを閉じてあの日のことに思いをはせれば、あつという間に僕はあの瞬間に戻れる。

母さんは刺された場所で救急車を呼ばずに、自力でここまで帰ってきた。恐らく僕たちに会うために。

父さんもその夜は家にいて、激しく鳴るチャイムを怪しみながらドアを開けた。血だらけの母さんが倒れるように入ってきた。

父さんがその身体を受け止め、父さんと僕で何度も母さんに呼びかけると、母さんは霞みつつある瞳で僕を見つめた。

「信じてるからね」

どういふつもりで言ったのかはよく分からない。でも母さんは僕に手を伸ばして、はつきりとそう言った。

その後のことはよく覚えていない。父さんに言われて、慌てて電話で救急車を呼んだこと。救急車に乗り込んで病院に行ったこと。

医者が沈痛な面持ちで母さんの死を伝えたこと。母さんを茶毘にふしたこと。全てがバラバラで、でも連続性のある出来事として僕の中に眠っている。今でも意識を傾けさえすれば洪水のように凄い勢いでその記憶が蘇ってくる。

「お〜い、直己？ 早く来いよ」

「はいはい！ 今、行きます」

僕は軽く頭を振って気持ちを切り替えて、弥生さんからのおすそ分けもって部屋を出た。

「父さん」

「あん？」

カレー料理ではちょっと見たことのないものを皿の中に見て僕は父さんに尋ねた。

「これ、何かな？」

僕の目が正しければ、これは明らかにキュウリだ。何でこれがここに……。

「キュウリだな」

「キュウリ。カレーに？」

「直己がバリエーションに乏しいって言うから、今日は少し違う野菜を入れてみた」

「なるほど」

父さんも色々考えているんだなということにして、僕はカレーにまみれたキュウリを口に運んだ。ボクボクした歯ごたえがなんともいえず、瓜っぱい。

「今日は頑張った。キュウリのほかにトマトにレタス、ハムも入れてみたんだ」

それはサラダの材料だよ、父さん。

なぜか胸を張る父さんにそんなことは口が裂けてもいえなかった。いつか気がついてくれることをひたすら祈るしかない。

「そうそう。今週末出張が入りそうなんだ」

父さんは忙しい。母さんが亡くなって以来、月の半分以上は出張する。稼ぎ頭の母さんの収入がなくなつたのに、これから僕はお金がかかってくるから父さんは頑張って働いているのだらう。

「ごめんね、僕のせいで。父さん働くの嫌いそうなのに。」

「今度はどこ？」

父さんに謝るかわりに僕は違うことを尋ねた。

「安倍川餅」

「静岡だね」

「大当たり！ 今度は長い。一週間くらいだ」

「確かに。長いね」

でもこっちにして見れば願ったり叶ったりだ。金ちゃんの子は夜遊びがひどいらしいから、その素行調査に出かけられる。

それにしても、一週間で静岡に何をしに行くのやら。その時僕は、何やら唐突に閃いてしまった。

「ね、今週さ、宿題で父親の職業について作文を提出しないとけないんだ」

これはウソだ。そんな小学生のような宿題が中学三年にもなっているわけがない。

「父さんの、本当の職業って、何？」

「以前、話したろ。コンピューターエンジニアだよ」

機嫌よくそういう父さんに、僕はスプーンを置いて真面目な顔でじっと父さんの顔を見つめる。

「僕も、もうそんなに子どもじゃないんだよ。本当のことを教えてよ」

「……」

父さんの茶色っぽい瞳と眼が合う。

どう鼻肩目で見ても、父さんが堅気の会社員でないことは火を見るより明らかだった。

普通の会社では許されないであろう、さらさらの長髪を束ねることなく肩に流し、驚くほど細くて長い指には指輪がいくつかはめられている。そのうちの一つにさりげなく母さんの指輪が混じっている。たまにそれを見つめてため息をつく父さんは、見ていられないくらい切なそうな、淋しげな顔をしていて僕はどきりとする。何だか置いて行かれるような気がして、たまらない気持ちになっってしまう。

「お前も、もう今年で十五だもんな」

父さんはもの憂げな表情で耳元に光るピアスを触った。毎日の服に合わせて色々と変えている。要するに父さんはお洒落なのだ。

そして父さんは異常にルックスがいい。自分の父親ながら、見ほれてしまうくらいの男っぷりだ。どっかの芸能人といっても通用しそうだ。子持ちだとはとても思えない。そういうわけで、僕は父さんの本当の職業はホストか何かと思っている。

「本当のことか……」

「あの、父さん。僕さ、本当のことを聞いても驚かないから」

ホストといわれようと、軽蔑しないから。だから本当のことを教えてよ。

「……………」
父さんは瞳を閉じた。長いまつげが端正な顔に影を作る。

「……………」
「……………」

沈黙に耐えられなくなって、僕は思い切って心の中にある言葉を投げかける。

「ねえ、父さん、本当はホストなんじゃないの？」

「あ？」

父さんの顔からありとあらゆる表情が抜け落ちる。

「なんだって？」

「だからホスト、さん……………」

顔を赤くする僕をポカンとした顔で見つめて、父さんは我に返って手の平を顔にやってそれを隠すようにして笑い出した。

「俺が？ ほ、ホスト？」

「違うの？」

小さい声で何うのように尋ねると、父さんは肩を揺らして笑い続けた。

「確かに俺はいい男だけどさあ。ホストか、それは傑作だな！」

げらげらと腹を抱えて笑う父さんを尻目に、僕は慥然とした表情でカレーを口に押し込むことに専念した。

「あー、おかしい。久しぶりにこんなに笑った」

たっぷり五分は笑ってから、父さんは笑いすぎて出てきた涙を拭いた。

「悪かったね、突飛な考えで」

「いやいや、息子よ。想像力豊かというのは大事なことだよ」

弥生さんに頂いたおすそ分け 昼間食べたケーキを口に運んでいと父さんがテーブル越しに手を伸ばしてきた。

「おもしろいな。直己が大人になったら、一緒にホストでも開業し

「ようか」

「僕が経理で、父さんが一人で稼ぐわけ」

結構厳しくない？ というと、父さんは首を振った。

「まさか。俺とお前の二人でホストさんをするんだよ」

「無理でしょ、僕じゃ」

「いやいや、お前が稼ぎ頭だよ」

「まさか」

親の欲目と言ってもあまりにも盲目だ。

「お、信じてないな。これは本当だぞ。何て言っただって、お前は俺と夏鈴かりんの合同傑作だからな」

夏鈴というのは母さんの名前で、夏鈴と発音するたびに父さんの瞳はふわりと優しくなる。それを見るとまだ父さんは母さんのことを愛しているんだなと思って、いつも胸が温かくなる。

「大丈夫。その時が父さんが直々に女性のマンゾクのさせ方とか、避妊の方法とか、その他色々と教えてやるからな」

「……」

本当にこの親父はホストじゃないのか？

+++

金田聡（父）の依頼にもとづく金田毅（息子）の素行調査。

夜十時に必ず家を出て、父親の家の周りをうろつく。そのあと十時ごろから駅周辺のライブハウスに入り浸り、午前一時ごろに自宅に帰宅。

「ってというのがこの三日間、毅クンをストーカーして分かったことだよ」

「不良だね」

僕の調査票に目を通して、開口一番に葵はそう発言した。

今日は邪魔をしに来る人がいない僕の家で作戦会議をしている。

葵は当然のような顔をしてリビングのソファに座ってクッションを抱きかかえている。

僕は床に座って、葵の座っているソファーに身体を預けて首だけ回して会話する。

「そうだね。十八歳未満の十一時以降の外出は禁止だもんね」

「そうじゃなくてっさ」

葵の顔が彼女の抱えているぶーたれた顔をしたキャラクターのクッションとそっくりになった。かなり笑える。

「違うの？」

僕は努力して笑いをこらえる。

「違うよ。私が言ってるのはナオのこと。いくら玲二さんが出張で家を空けているからって、そういうのはどうよ？」

玲二というのは僕の父の名前だ。

「どうって言われても……」

「だって夜に電話して息子が出なかったら、心配するでしょ？」

「携帯を持つてるから大丈夫」

「お化けが出たら怖いじゃない」

「僕はそういうの信じてない」

「誰かのペットのガラガラヘビが脱走していて、ナオに飛び掛ったら危ないじゃない」

「ありえない」

即座に葵の言うことを切り捨てる僕に、彼女は思い切り頬を膨らませた。

「かわいくない！」

「だって可愛くないもん。可愛くなる必要性も感じないし」

「ナオちゃん」

葵は僕を諭すように肩に手を置いた。

「男は、愛嬌よ？」

「……何が言いたいのか？」

葵の口が動く前に、僕は先回りした。

「言っとくけど、葵が僕についてくるって言うのは絶対にナシだから」

「ら」

「え、何で？」

葵はまた頬を膨らませた。

「葵は、だーめ。夜道は危ないの。女の子は特に」

僕は懇々と葵を説き伏せる。

「自分の身は自分で守れるもん」

「甘いよ、葵。確かに君は図体が大きい分、並みの女の子よりも力は強いよ。でも大の男の力はもつと強いんだよ」

「……でも、ナオよりはずっと力あるもん」

「あのねえ」

僕はため息をついた。こいつは全っ然、男女における力の格差を分かってない。

「僕のほうが確かに小さいけど……」

「わからずや！ もう、実力あるのみ！！」

「うげっ！」

葵がクツシヨンを放り投げて僕にダイブしてきた。

天井が見えた、と思ったら背中に軽い衝撃を感じて僕の鼻先数センチのところにて得意満面の葵の顔が出現した。

「へへっ、どうだ、これで動けないだろう」

葵は僕の腕を押さえつけ、腿に座って動けないようにしているつもりらしかった。

「負けを認めたら、離してあげる」

さあ、さっさと負けを認めなさいという葵に、僕は小さなため息をついた。

全く、こいつはいつまでも子どもだ。

「一言、参ったといえればいいんだから」

「嫌だ」

「じゃあ、ずっとこのままにして……えっ？」

僕はちよつと気合を入れ、腕に力を込めて葵の手を振りきった。

そのまま彼女の肩の付け根に手を当て、軽く押すとあっけなくバランスを崩す。葵の手が空を切り、僕の眼鏡を弾き飛ばす。

何はともあれ形勢が逆転したのはあつという間だった。

二人の間に沈黙が落ちる。

「……………」

「……………」

なるべく葵に手を触れないように彼女の身体を押さえ込みながら僕はゆつくりと、少し脅かすような口調で語りかける。こういう時メガネを外すと悪人面になる（あくまでも葵曰くだが）というのは便利だ。すごんだ時に迫力が加算されるからだ。

「動けないだろ、葵。僕のほうが身長は小さい。でも、僕だつてまだまだ子どもだけど、男だ。君よりは力があるんだよ。大の男に襲われてみる。君なんか、ひとたまりもない」

僕の言葉に、葵の目が見開かれる。かすかに震えているのがわかる。

いつも元気で不可能などないと信じている葵をおびえさせたことに、ちくりと良心が痛んだが仕方がない。こいつはわが身で実感しないと学習しないのだ。

「やめて……………」

かすれた声が葵の口から漏れ出す。何となく不思議な色気を感じて僕はハツとした。

（……………？）

ぞくりとする。赤ん坊のときから一緒にいて、それこそ身体の黒子の位置すら知っている葵がどうしたことか女性に見える。意識せず ゆつくりと葵の細くて長い髪の毛に指を絡ませる。

（何、やってんだよ、自分？）

何だかどんどん妙な気分になってくる自分を感じて、がばつと身を起こして飛び退った。思わず無実を証明するように両手を挙げる。「痛いでしょ、ばか！ 女の子の身体はデリケートにできているんだから、もつと優しく扱ってよ！」

僕から解放された葵が起き上がって激しく抗議してくる。その彼女に反射的に謝る。

「じ、ごめん」

「全く、失礼なんだから！ だから今夜は私もナオについて行くからね」

「え、何でそうなるの？」

葵は時々わけの分らないことを口走る。

「何でも！ とにかく私もついていく！ ナオが私を置いていっても、私は勝手に外出しちゃうからね」

「え？」

「そうと決まったら、早速昼寝をしなくっちゃ」

立ち上がって、葵は猛然と玄関へと向かう。僕はバカみたいに彼女の後姿を見つめることしかできない。

「じゃあ、また夜に！ 置いていかないでよ！」

玄関で僕のほうを振り返って、葵は噛み付かんばかりの勢いでその念を押して去っていった。

「逆上させるとは思わなかったな……」

ずっと一緒にいるものの、葵という人間の生態は謎に包まれている。

「お待たせ」

自分の家の前で突っ立っていると、ニコニコした顔で葵が現れた。黒いジーンズに黒いシャツといった出で立ちだ。ご丁寧にも頭には黒い野球帽を被っている。夜陰にまぎれるには好都合な格好だが、交通事故に遭いそうだ。まあ僕も似たり寄ったりな格好だから何ともいえないけれど。

「ホントに来たんだ」

半ばこないことを期待していたのだが、葵はいつもと変わらない様子だった。

「うん、来た。早く行こう」

促されて連れ立って歩きながら、尋ねる。

「よく家からでてくれたね」

「今夜はナオの家で泊り込みで勉強するって言ったら、あっさりオツケーくれたよ」

それは娘の身を案じる親としてどうなんだろう。僕は家族のようなものだからいいと思っただのだろうか？ しかし思春期ばく進中の男の子が一人でいる家にトシゴロの娘を快く送り出すのも問題な気がする。葵の家は懐が広い。

「そんなんでいいのかね」

思わずこぼすと、葵はひらひらと手を振った。

「明日、土曜日で学校ないから」

葵がまたわけの分からない理屈をこねた。

「まあ、どうでもいいじゃん。こうして抜け出してこれたんだから、万々歳でしょ」

「僕にとつては万々歳じゃない」

渋い顔をする僕に、葵はあっけらかんと言った。

「まあまあ」

「いい、葵」

これだけは言っておこうと思って、僕は足を止めた。

「何？」

僕に合わせて葵も足を止めた。

こうして向かい合うと、つくづく身長差を感じる。葵を見上げるようにして、僕は釘を刺した。

「一緒に来てもいいけど。危なくなったら僕を置いて、逃げるんだよ」

「らじゃ」

葵がニカツと親指を立てた。本当に分かったのか心配になる。

「約束できる？」

「できる。約束する。ダイジョブ、信じて」

葵は軽いノリで了解する。

「葵に何かあったら困るのは僕なんだから、頼むよ」

ちよつと懇願するような口調で念を押し、僕はその話題を打ち切った。

「葵、こつち。金田ジュニアの家はこつちだよ」
再び歩き出す。

「ね、玲二さんが帰ってくるの、四日後でしょ？　いつこの依頼に決着をつけるつもり」

葵が僕の隣に並んで問いかける。

「できれば早めにケリをつけたいな」

「珍しいね。いつもは慎重の上に慎重を重ねるのに」

「今日さ、郵便局に寄ったら、既にキンちゃんから依頼料が送られてきてたんだ」

銀行口座をつくれぬ僕らは母さんが主張して作った郵便局の私書箱宛にお金を送ってもらうようにしている。母さんが亡くなった後も、父さんは仕事で使い続けているし、郵便を取りに行くのは僕の仕事なのでまさにうってつけなのだ。

「もう送ってくれたんだあ。早いね」

「そうなんだ。ご丁寧にも、早めにお願ひしますっていうメッセージつきでさ」

僕たちの仕事は成果が目に見えないので、前払いをお願いしている。その代わり、お金が送られてきたら三日以内に処理する約束をしている。

「ははあ。じゃあナオ的には私もいるし、今夜決着をつけたいんだ」
葵が僕の顔を覗き込んできた。

「……まあね」

僕は葵から瞳をそらした。実は彼女に報告していないことが一つだけあった。それは毅が悪い仲間とつるんでいるかもしれないということだ。

父親の家の周りをうろつろしている時は一人のだが、ライブハウスから出てくるときは必ず大人数で出てくる。それもそうとう柄の悪い奴らだ。酒が入っているらしく、彼らが口にするのは「ぶっ

殺してやる」だの「痛めつけてやる」といった穏やかでない単語だった。毅を見ると、頑張ってあわせているような、そんな雰囲気がある。たった三日しか観察はしていないのだが、僕はあまり深入りしないほうがいいと判断を下した。

葵を連れてこないと仕事ができないことを考えると、決着をつけるのは土曜日か日曜日の明るいうちにつけたい。

そう考えて僕は不意に思い当たった。

(何も今夜、調査する必要なんてなかったんじゃない?)

明日か明後日の昼間に決着をつけるのなら、何もわざわざ葵を連れて調査する必要はない。

大体、今夜の調査そのものが必要ないではないか。確かに僕の好奇心はうずいてならないけれど。

「葵、か……」

帰ろうと言おうとして、僕は言葉を飲み込んだ。毅が向こうから歩いてきたからだ。

反射的に時計を見るとまだ九時四十分だ。彼が行動を開始するのは大体十時だというのに、どうしたことだろうか。しかもかなり思いつめたような顔をしている。

嫌な予感がする。

「どうする?」

実際に会うのは初めてな葵も、戸惑ったような顔で尋ねてくる。

「毅よりさきに金ちゃんのアパートに着こう」

「らじや」

僕たちは何食わぬ顔で毅とすれ違う。路地にすつと入り込んでから僕は葵の手を引っ張って裏道を全力疾走した。

あの顔ではもしかしたら聡を殺すつもりかもしれないという危険が湧き上がる。

「間に合ったかな!」

息を弾ませながら物陰から金田父の住むアパートの二階の部屋を見つめる。すると計ったように人影がすつと浮かび上がり、カーテ

ンが開いた。

見慣れた金田の顔が現れたかと思うと、外を見てため息をつく。誰かの姿を探すように視線を動かしている。しばらくそうやって外を眺めてから金田は再びカーテンを閉めた。

「まだ来てなさそうだよね？」

葵が願望がないまぜになった声で僕に聞いてきた。

「うん……多分」

あの目つきは多分息子の姿を追い求めていたのだと思う。多分、恋人の姿を待っていたのではないと思う。

「あ、来たよ、毅！」

僕の背中を力一杯叩いて、葵が嬉しそうに声をあげた。背中が痛むのを我慢して、辺りを見回すと、毅の姿が街灯に浮かびあがっている。

「やっぱり、押し込むつもりかな？」

「し、黙って」

心配そうな声を出す葵を僕は注意した。

息をつめて観察していると、彼は何度かアパートに入ろうとして躊躇い、結局足を踏み入れることはなかった。ポケットに手突っ込んだ姿で助けを求めるように父の住む窓をじっと見上げてやがてあきらめたように夜の闇の中に紛れていった。

「何がしたかったんだらう？」

葵が首を傾げた時、二階の窓のカーテンが開いた。

「あ……」

もう毅の姿は見えない。

「もう少し粘っていれば父親と顔を合わせられたのに……」
切なそうな顔をする葵を僕は促した。

「行こう。彼の後を追うよ」

ここまで来れば乗りかかった船だ。毅が何をするつもりなのかしつかり見届けてやると思ったのだ。その選択を、後で物凄く後悔することになることも知らずに……。

毅の行き先はやはり行きつけのライブハウスだった。

「どうしようか……」

「どうする？」

何となく危ない雰囲気漂うそのライブハウスに入るのは躊躇われて、僕たちは顔を見合わせて入るのを躊躇った。

「やっぱり、入らないと毅が何をしようとしてるのかはわかんないよね」

「でも、僕たちに何かあつたら困る」

「だよ。でも『修復』するチャンスもあるかもよ」

「商売より、自分の身のほうが大事じゃないかな？」

堂々巡りの論議をしていると、入り口付近が騒がしくなつて六人ほどの人が店から出てきた。相当、柄の悪い連中だ。髪は悪趣味な色に染め、腕にはタトゥーが入っている。ピアスは耳はもちろん鼻やら口やら、沢山つけている。そいつらに首根っこをつかまれた毅が不安げな表情をしている。

そいつらの言葉が僕らの耳に入ってくる。

「金田。お前、自分から俺達の仲間に入りたいて言つたんだぜ」

「今更、金を巻き上げるのなんてできないなんでそんなツメタイこと、言うんじゃねえよ」

「そうそう。俺たちは金を持っていてる奴らからもらつてるんだぜ。」

富のサイブnpaiをしてるんだよ」

「大体、俺達の仲間から抜きたい何て言うつていうことは、覚悟はできてんだろうな」

若者達は毅を小突き回す。

無意識のうちに僕の喉がぐくりと音を立てた。これはヤバイ展開だ。暴走族が足抜けを願う仲間を半殺しにして他の仲間が続いて脱退するのを防止するというのを聞いたことがあるが、もしかしたらそれをするつもりなのかもしれない。

「ね、一体どういうこと？」

箱入り娘の葵が首をかしげた。

「葵。君は帰ったほうがいいよ。この先は、僕が後をつけるから」
僕は連中の後をつけて、あんまりにもひどい場合は警察に通報するつもりだった。

「え………」

葵が不平を言おうとしたとき、若者たちの一人が激しく毅を殴りつけた。

「え……？」

葵の表情が固まった。

彼女の目の前で毅がもう一発殴られ、彼の鼻から血が流れ出す。

「葵………」

蝶よ花よと育てられた葵は特にこういう暴力シーンに弱い。勝てるかどうかは考えずに正義感だけで戦いを挑む傾向があるのだ。

まずいと思い、葵をpushさえつけようとしたが間に合わなかった。
僕の手を振り切って、葵は道のと真ん中に飛び出し、顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「やめなさいよ！ 大勢で一人をリンチするなんて、猿人類以下なんだから！」

「何だ、こいつ？」

六対の瞳が葵に注がれる。まだそんなに遅い時間ではないというのに、通りには人の姿が見えない。なんで今に限ってと舌打ちをして僕は慌てて彼女の前に飛び出す。

「す、すいません。彼女、酔ってるんですよ。勘弁してやってください」

「私は酔ってない！ 未成年なんだから、飲んでません！」

厄介なことに彼女は渾身の力を振り絞って僕を押しつけた。思わずよろめくと、葵は一步前に踏み出した。

「最低よ、あんたたち！ 社会のクズって、あんた達のようなことをいうのよ………」

「葵！ この、ばか& amp; # 8 2 5 2 ;」

「何だと、この女& amp; # 8 2 5 2 ;」

僕が葵を咎めたのと男たちがキレたのはほぼ同時だった。

「今夜はこの女をオードブルにたっぷり愉しんでから、このゲス野郎にとりかかろうぜ& amp; # 8 2 5 2 ;」

誰かの言葉を合図に二人は聡を押さえつけ、後の四人が僕たち二人のほうへ走ってくる。

正直、動けなかった。あまりに急な展開についていけない。それは喧嘩を売った葵も同じだったようで、目を見開いたまま凍りついていた。

ようやく金縛りが解けたのは、相手の手が葵の服にかかってびりっという布の破れる音がしてからだった。

「やめろ！」

僕は後先考えずに男の腕に飛び掛り、振り払った。

「逃げろ、葵！」

動けずにいる葵に叫ぶと頬に衝撃があった。眼鏡が嫌な音を立てて吹き飛ぶ。

「行けよ、バカ！」

身体を押さえ込まれながら、僕は力いっぱい葵の身体を押した。

「助けを呼んで来い！」

僕の一言で、葵は弾かれたように走り出した。少し足がもつれたりしていたが、とにかく走っていく。

後を追うかどうしようか迷うそぶりを見せる若者に、僕は大きな声で言った。

「彼女、すぐそこの交番に駆け込めよ！ まずいんじゃないの& amp; # 8 2 5 2 ;」

「この、くそガキ！」

忌々しげな舌打ちの音と共に身体にひどい衝撃があって、僕はあっという間に意識を失った。

+++

目が覚めて真っ先に耳に飛び込んできたのは、肉を殴打する音と弱々しい悲鳴だった。とても現実のこととは思えなくて、僕はボンヤリと辺りを見回した。

どこかの倉庫なのだろうか。明かりがないのでよく分からないのだが、無愛想なコンクリートの壁に囲まれた小さな部屋だということ は分かる。

「金田、お前なんか死んじまえよ」

そういえば身体がひどく冷たくなっていて、すごく痛い。何でだろうと考えていて、ようやくそのわけに思いあたる。僕は今、手足を縛められて冷たいコンクリの床に転がされているのだ。

「おい、目が覚めたみたいだぜ」

かすかに身じろぎをすると、誰か一人が気がついた。一斉にこちらを見てるのが視線で分かった。

懐中電灯のスイッチが入られ、逃亡中の犯人の姿を照らし出すように僕にライトが当てられた。

「なるほどね……」

束の間、沈黙が落ちて誰かがごくりとつばを飲み込む音がした。

「これはイイかもな」

「女じゃないのが残念だが、ま、いいんじゃないか？」

何がいいのかよく分からない。

それより頭が痛くて仕方がない。ひどく打ったのだろうか。

「……」

六人が近づいてくる気配がして、僕の身体に鳥肌がたつ。

何をするつもりだ……？

「やめろよ、そいつは俺とは関係ないだろうが」

弱々しい声があがる。殺のものに違いない。

「お前は黙ってる」

再び殴打する音が聞こえる。僕は目を閉じて、吐き気がこみ上げてくるのを必死に押さえる。

「死んじまえ。お前なんか、いつそのことないほうが世のためだよ」

その言葉に僕は頭の一部分が真っ白になった。

母さんを殺した奴のことがふつと思ひ出される。

「死ねよ、お前」

僕は瞑っている目に力を込める。叶うことなら耳をふさぎたい。

(母さん……)

母さんを殺した犯人は、未だにヌクヌクと生きている。ふと、疑念がよぎる。もしかしたらこいつらの誰かが母さんを殺したんじゃないのか？

違うかもしれない。

(でも)

僕は目を見開き、そして思う。

こいつらが人を殺す可能性は大きいし、このまま野放しにしておけば、殺のような被害者がまた出てしまう。

そうだ。

(いつそのことないほうが世のためじゃないか?)

消してやる。

決心する。そう、決心さえすればよかった。

「出て来い！」

僕は思い切り叫んだ。

「何言ってるんだ、お前？」

誰かが怪訝そうに言う。

「出て来いよ！」

今度は明確に、相手の胸から心を引き張り出すイメージをして叫ぶ。

「うっ」だの、「あっ」だのという呻き声をあげて、人が床に崩れ落ちる音がする。瞬きをすると床に丸い球が七つ転がっていた。六つはどす黒く、穴だらけで、一つは灰色で一部にぼっかりと穴が開いていた。

(殺してやる)

今の僕の心に満ちていたのは明確な殺意だった。

(そつだ、殺してやる)

自由は束縛されていたが、殺す方法は簡単だ。僕が歌えばいいのだ。

僕が葵と組んで仕事をしているのにはわけがあった。僕は母さんが無くなって以来、人を癒す歌が歌えない。

僕の歌は死を招く。

そのことに気がついたときは悲しかったけれど、今はそのことを心から感謝する。

「害虫は、駆除しなきゃ」

僕の口から旋律がほとばしる。

(消えちまえ！)

床に転がる球の穴がどんどん開いていく。一つの穴が隣の穴とながり、どんどん実体がなくなっていく。若者達の顔も苦しげに変化していくのを僕は無表情に見つめ、淡々と旋律を紡ぎだす。誰に教わったわけではないが、心がこういう形で無理に消されてしまえば、肉体的にも死んでしまふとわかった。

後もう少しで完全に消せると思ったところで不意に母さんの声が耳に蘇った。

『直己』

あまりに唐突で、僕は歌をやめて息をのんだ。

「母さん」

『信じてるからね』

母さんは何を言いたかったんだろう。

しかし今はそれを考えている時ではない。気を取り直して歌い出したが、母さんの言葉が壊れたオーディオのように繰り返し再生される。

『信じてるからね』

「……………」

母さんはどんな方法であつても人を傷つけることを極端に嫌う人だつた。

『あたしたちはさ、無意識のうちに人を傷つけてしまつたよ。だからせめて、相手が傷つくつて分かつてるコトはやめようね』

幼稚園のときに言われた言葉を思い出す。そんなことを小さな子供に言つても理解できるわけがないというのに、妙に真剣な顔で言われたことをボンヤリと思い出した。

「……やめた」

声に出して宣言するように言つてから僕は口をつぐんだ。こんなことをしても、あの母さんが喜ぶと思えない。

床に転がっている七つの球をみると、かなりの部分が損なわれてしまつている。「修復しなきゃ」と思い、僕は思い当たつた。

僕は癒しの歌が歌えない。

葵が助けを呼ぶだろうから、彼女が来たら頼もつとのんびりと思つていた僕は目を剥いた。球が、自壊を始めていた。

「え、それはやばいよ」

自分の破壊衝動が生んだ結果だ。どうしようと慌てるが、どうしようもない。それでもただ見ているだけはいやだつた。

『人生には一か八か賭けてみる必要がある』とは父さんの口癖だ。唇を強く噛みしめて、僕は賭けてみることにした。

(治れよ)

心に思い浮かんだ旋律を、ありつたけの思いを込めてつむぎ出す。自壊のスピードは一旦、止まるかと思えたがしばらくすると再びゆっくりと進んでいく。

(だめか)

『まったく、ナオはすぐにそうやって諦める。諦めないの！ 諦めたらそこでおしまいなんだよ！』

唇を噛みしめてあきらめ掛けたとき、葵の明るい声が聞こえた。

(葵……)

『ナオがピンチになったら、私が必ず駆けつけてあげるからね』

(そっか)

僕は自分でも拍子抜けするくらい簡単に一つのことを思い当たった。

(僕がすることは葵が来るまでにこの球を消さないことなんだ) 治さなくなっていたいい。葵なら、きつと来てくれるから。

そう思うと、ずっと気が楽になって僕はもう一度、歌い出す。

「直己！」

突然バンッとすさまじい勢いでドアの開く音が僕の頭のところでして、外の新鮮な空気がよどんだ部屋の中に入り込む。

それと同時に美しい旋律が空気のように部屋いっぱい広がる。

葵の歌とも違う。もっと繊細で優しい。

僕の胸を支配していた負の感情が薄れていく。かわりに湧き上がる温かな気持ちに、僕は歌うのも忘れて瞳を閉じてその声に身をゆだねた。

「ナオキ！」

軽やかな足音がして、聞きなれた葵の声が耳を打つ。

「葵……」

「直己！ よかった、無事で」

珍しく葵が僕の名前を省略せずによんだ。

「無事とは言いがたいけどね」

「でも、とりあえずテイソウも無事で五体も満足だから、よかった」

「無事じゃなかったら、俺が一瞬であの世に送ってやる」

葵の後ろからひよいと顔を出した人物は……

「うっそ。出張だったんじゃないのかよ、父さん……」

「用事が早く終わったから帰って来たんだ」

「走ってたら玲二さんにぶつかってびっくりだったの」

何でこうなるんだよという思いがこみあげて来る。親には絶対に知られたくなかったのに……。今までの苦労は水の泡だ。バカ葵。あれほどまでに二人でこの力は隠そうねと誓い合ったのに。

「直己、お前さ。こんな力があつたんだな」

父さんの一言で僕の意識はあつというまに奈落の底に落ち込んだ。
知ラレタクナカッタノ二。

+++

目を覚ますと僕のベッドのそばの椅子に父さんが優雅に座り、本を読んでいた。右手に白い包帯がきれいに巻かれているのが目につく。

「おはよう、直己。よく眠れたか？」

天使のごとき微笑を浮かべて父さんが尋ねてくる。

「あ、うん。おかげさまで……」

「心配するな。お前に手を出したチンピラは俺が徹底的に懲らしめてやったぞ」

今頃病院でヒイヒイ言ってるだろうよと父さんが包帯の巻かれた右手をひらひらとふって嬉しそうに教えてくれた。

「一人、ボコられていたいた奴がいたろ？」

殺のことと気がついて彼がその後どうなったのか心配になる。

「あいつは葵ちゃんが悪い奴の中に入るからそうなるんだとシツカリと叱って、無事に帰してやったから」

俺的にはお前をこんな目に合わせた元凶だから、一緒に病院送りにしたかったんだけどなと父さんは物騒なことを付け加える。それはいくらなんでもあんまりだろうと思いつながら、僕は黙っていた。

「……」

「何か、食つか？」

なぜか父さんが、優しい。それが気味が悪くて、僕はベッドに起き直りその上に正座をして手を突いた。

「ごめんなさい、危ないことに足を突っ込んで。特に葵を巻き込んだこと、反省してます」

「……」

黙ったままじっと見つめてくる父さんに、僕は更に言い募る。少し早口になってしまふ。

「あの、ごめんなさい。普通じゃなくて」

人の心を引く張り出すなんて、尋常じゃないことはよく分かって
いた。気味が悪いと思うだろう。だからこそずっと隠していたのだ。
父さんの顔に浮かぶであろう驚愕の表情を見たくなくて、僕は目を
そらす。

そういえばと考える。結局、昨日は誰が癒しの歌を歌っていたの
だろうか。葵ではないと思っていたのだが、もしかしたら彼女だっ
たのかもしれない。きっと父さんではないだろう。そんな都合のよ
いことがあるはずがない。じゃあ、一体誰が……？

「いつからだ？」

「わかんない。物心ついたときには既にできた」

ともすれば小さくなっていく声を両手を握り締めて励ます。

「普通じゃないって、わかってるよ、こんな奴は気味が悪いだけだ
って。愛して欲しいとは言わないから」

目をそらしたまま、僕は懇願する。

「せめて中学を卒業するまで、屋根を貸して下さい」

「ばーか」

不意に父さんが僕を抱き寄せる。

「昨日の、俺の歌をすばらしい歌を聞かなかったのかよ？」

「え？ やっぱり、あれは父さんが歌ってたの？」

「あつたり前」

ギョツと抱きしめて父さんは満足げなため息をついた。

「お前、俺の才能をちゃんと引き継いだんだな」

華奢に見える父さんの胸はがちりちりとしていてたくましかった。

大人の男の胸だ。

「さすがは俺の自慢の息子」

偉いぞと満面の笑みで頭を撫でられて、僕は思わず泣きそうにな
った。今まで異常だと思つて必死にこの力を父さんに隠していたの
が、急にバカらしく思えた。何だ、父さんは僕のことをちゃんと認
め、自分にもその力があるんだと教えてくれたじゃないか。

急に今まで感じたことのない大きな安堵感に包まれる。僕は何度も瞬きをしてこぼれそうになる涙を必死に押さえ込んだ。

「でも僕は癒しの歌は歌えない。母さんが死んでから、歌えないんだ」

一つ、気分を変えようと息をついてから僕はおもむろに話し出した。

「シヨックが大きかったからだろうな」

よしよしと父さんが頭を撫せてくれる。

「でも、もう大丈夫だよ」

根拠のない自信を見せる父さんを、僕は疑いの眼差しで見た。

「母さんの敵は、取ったよ。昨日な。あの出張はそのためだったんだ。」

「どういうこと？」

父さんの真意を測りかねて尋ねる。

「母さんが死んでから、出張が多かったのはな犯人を追って全国各地を巡ってたのさ」

「どうやって犯人を捜したのさ？」

きつと胡散臭そうな顔をしていたのだろう、父さんが僕の鼻を引っ張りながら得意満面で教えてくれた。

「俺には警察筋の情報網があつてな」

何ともウソ臭い。それなのに、この親父ならそういう情報提供者がいそうだと思ってしまうのはなぜだろうか。

「……殺したの？」

恐る恐る尋ねると、父さんはあっけらかんと笑った

「まさか！ そうしてやりたかったんだけど、それをする俺が豚小屋に入ることになるからな」

父さんがあっけらかんと笑った。

「お前を置いて俺が豚小屋に入るわけにはいけないからな。かわりにそいつをぶちこんでやったよ」

ざまーミ口と目を細める父さんから殺気が漂っている。怖いな、

この人。

「それはそうと」

父さんは何かを思い出したような顔で、突然相好を崩した。

「夏鈴はやっぱりイダイだったな」

「は？」

「あいつ、最後にお前に言ったろ、『信じてるからね』って」

「うん」

「あれはきつと、お前に俺の力が遺伝しているって悟ってたんだよ」

「……」

話が見えない。

「いつかお前のなかに殺意が芽生えて、人を殺してやるって思うってさ、わかっていたんだよ。きつと」

「……？」

「だから、言ったんだよ。『信じてる』って。決してお前が特別な才能で人を殺すことはないって。最後にはきつと思いとどまるって」

「そうかな」

そんな深い意味があるとは思えなかったが、確かにあの時僕が思いとどまったのは母さんの言葉だった。そういう意味で母さんは何かを感じていたのかもしれない。

そういえば母さんは妙に勘がいい人だった。

「直己、自分の能力に自信を持っていいぞ。不思議なことに人は誰もが誰かがある程度までは救えるものなんだが……」

「そうなんだ」

「ああ。だから、葵ちゃんでもお前の代わりができたんだよ」

僕は半信半疑の瞳を向ける。そばで葵の仕事をしていた僕としては彼女の事は、とてもいいということを知っていたからだ。

「でもな。俺やお前は相手の心を壊すか治すかをほぼ百パーセント、コントロールできる」

そういわれてもぴんとこない。

「直己。もつと肝心なのは心を引っ張り出す能力なんだよ」

「心を、引っ張り出すこと……」

「そう、心を引っ張り出すことだ。これができなければ、直接的には何もできない」

「あ……そっか」

確かに葵の歌はすばらしい。でも確かに彼女は人の心を引っ張り出すことは一切できない。

「直己、教えてやるよ。俺の本当の仕事は警察に協力して、心の病んだ犯罪者達の起こす異常な事件を解決することなんだ」

安月給でこき使われているんだと父さんがウソ泣きした。

「うそ臭い」

僕は顔をしかめた。

「ホントだつて。声なら少しはなれたところからだつて心を取り出せる。心を取り出されると、動けなくなるだろ。人質を取っている時とかはかなり有効なんだ」

「確かにそうだけどさ、そんな仕事、聞いたことない」

僕の言葉に、父さんは笑った。

「極秘任務だからな。一般人には伏せられているんだ」

「極秘、任務ねえ」

白い目で父さんを見やると、ふと真剣な顔をした。

「なあ、直己」

「何？」

「やつぱり、夏鈴はいい女だったよなあ。お前の危機を予測しているなんて、何て知的なんだろうな」

うふふと父さんが笑う。気色悪い。

「ごちそーさま」

「冗談はおいといて」

「え、今のは冗談だったの？」

目を丸くする僕はすっぱりと無視して、父さんは僕の目を覗き込んだ。

「ずっと考えていたことなんだが、俺はもつとこの能力に磨きをか
けたい」

「……？」

「お前に俺と同じ能力があると分かった今、お前も力をコントロール
できないとまずい」

「そうだね。父さんが教えてよ」

「俺にはできない」

「何で？」

不思議そうな顔をする僕に父さんはちょっと困った顔をした。

「俺の場合、自己流だからなあ。残念ながら人に教えるようなアド
バイスはできないんだ」

「そうなの？」

「日本ではまだまだ俺たちのような能力の研究は未熟だしな。そこ
で、だ」

僕の耳に唇を近づけて、父さんは母さんがいなくなってからずつ
と考えていたという計画をささやいた。

「な、アメリカ、行こう」

+++

結局、僕は父さんの提案への回答は、ちょっと保留にさせてもら
った。誰だって研究が進んでいるからアメリカに行こうと突然言わ
れたら、少し考えたくなるだろう。

何はともあれ、何か重要事項があると必ず葵に相談していたので、
今回もそうしようと僕は彼女を待っていた。今週は葵の班が裏庭の
掃除当番なのだ。

教室で特に何もすることなく、机の上に腰掛けて壁にもたれてボ
ンヤリしていると、不意に声をかけられた。

「静」

「うわ、はい！」

目の前に担任の金田が立っていた。てっきり机に座っているのを怒られるのかと思ったたら、金田はそんなことはどうでもいいと手を振った。

「お前、志望校の紙を出してないぞ」

「あ……。忘れてた」

完璧に忘れていた。父さんの出張が挟まっていたから、保護者のサインが埋まらなかったのだ。帰って来たらすぐにサインしてもらおうと思っていて忘れていた。

「すみません、親のハンコがまだなんです」

「そうか。お前、志望校はどこにするんだ？」

「実はまだ、決めてないんです。父に、アメリカに行こうといわれてまして」

「アメリカ……。お父さんの仕事か何かか？」

「まあ……。そんなもんです」

まさか本当のことは言えず、言葉を濁す。

「そうか。お前は、行きたいのか、アメリカに？」

「わかりません」

率直な気持ちを口にする。

「わからないというよりは、行きたいけど、二の足を踏んでいるって感じかな」

「……息子とな」

金田がヒトリゴトのように話し出した。

「……」

僕はなるべく無関心を装いながら、注意を最大限、傾けた。殺のことは気になっていたのだ。一体どうしているんだろう。

「一緒に暮らすことにしたんだ」

「……」

僕は注意深く沈黙を保った。

「ここだけの話、離婚の原因は俺の妻が不倫をしてな」

金田は疲れたように言って、近くの椅子に座り込んだ。

「本当は息子と一緒に暮らしたかったんだが、子供は母親と一緒にほづが良かろうと思つてな。親権を譲り渡したんだ。息子もその男のことを認めているみたいだったしな。でもあの子はどんどん悪い奴らの中に入って行つた」

「……」

「それが先日、何を思つたんだか足抜けを宣言して、ボコられた。」

金田は指先を見つめて先を続ける。

「ボロボロになつて、転がり込んできたのは俺のアパートでな」

金田は顔を上げてにこりと笑つた。始めて見る満足そうな生き生きとした顔だ。

「転がり込んできたときは驚いたな。でも、毅の奴、言つてくれたんだ」

『今まで拒絶されたら困ると思つて言わなかつたけど、俺やっぱり親父と暮らしたい。だから不良連中から足抜けしてきた。だからここに置いてくれよ』
ぶつきらぼうに毅がそう言うのが目に見えるようで僕は思わず微笑を漏らした。

「よかつたですね」

「ああ、全くだ。で、つまり何が言いたかつたかと言つとだな。迷うなら、やってみろつてことだ」

落ち着いた口調で、しかしどっしりとした質量を込めた声で金田が言つた。

「俺達はそれで半年間かつた。後悔ばかりの期間だつたけれど、決意を固めるために必要な年数だつたかもしれない」

でもなと金田は僕に言つた。

「気持ちがあつて固まっているのなら、一步、前に踏み出してみなさい」
ヨッコラシヨとじじむさく声をかけて金田が椅子から立ち上がった。

「静」

「はい」

「お前、ちゃんとやりたいことがあるんだろう、アメリカで」

「……はい」

「お前なら、大丈夫だ。どんなことでも乗り越えられる。お前はそういう人間だよ」

金田はそう言い残すと、すべるように教室から出て行った。その背中が、どこかしら父親の威厳が漂っているように見えた。

(カッコいい……。僕も背中で語れるようになりたいな)

背中にうっとり見とれてから、ふと時計を見ると、時計は四時を指しかけている。

(葵、遅いな……)

いくら掃除当番とはいえちょっと遅すぎる。教室に鞆は残っているのに、まさかそのまま帰ったということはないだろうけど……。

僕は勘を頼りにふらりと構内を歩き出した。すれ違ふという心配は全くしていなかった。幼馴染ですつと一緒にいたせいか、不思議と相手がどこにいるのかわかってしまうからだ。

今日は何となく体育館の方に歩いていく。

(あれ、いない……?)

ひんやりとした空気の漂う体育館に足を踏み入れても、そこには人っ子一人見当たらない。

勘が外れたのは初めてのことと、少し戸惑って窓の外を見やる。

するとそこに人影が見える。ここからだ二人の横顔が丸見えで、

一人は葵のものだとわかった。もう一つは？

(男?)

距離があるので二人の会話は全く聞こえないが、かなり親密な様子が見て取れる。少なくとも一日や二日の仲ではないことは確かだ。

(葵に、カレシ?)

驚きが体を駆け巡る。

あの、葵にカレシ！ がさつで、子供っぽくて、大食いの葵に！

何だか現実感がない。

でも、と僕の心の声がささやく。

葵は可愛い。目は生き生きと輝いているし、長身で、思春期の女の子にしては細身だ。感情に素直で、表情もころころと変わるし……。

(うちの子も、お年頃なのねえ)

嬉しいという気持ちはあまり起きなかった。むしろドロリとした気持ちが増える。自分のおもちやを横取りされた子供が感じる感情に近い。なぜこんな気持ちになるのか、我ながらよく分からない。

僕の目のまで影がユラリと動いた。少しずつ二人の顔の距離が縮まる。

(……え?)

二つの影が一つになったとき、僕は自分でも不思議なくらい狼狽してしまった。取り合えず回れ右をしてこっそりと、しかし大慌てでその場から立ち去る。

「な、何も見てないぞ、僕は」

そう言い聞かせるように言って、僕は自分の荷物を教室まで取りに行き、そのまま帰宅した。

だってあんなシーンを見た直後に、どんな顔で葵と顔を合わせればいいんだよ?

居間のソファーに転がって、僕はじつと天井を目の敵のようにして見つめる。

(落ち着け、落ち着け……)

混乱しきった頭をそうやって必死に整理する。

(僕にとって、葵は妹みたいなモンじゃないか)

それなのにどうしてこんなにも狼狽しているのか。人類の神秘だ。「……」

いつの間にかうとうととしていた僕は、ピンポンとチャイムの鳴る音で目を覚ました。

起きるのが面倒くさくて、僕は無視を決め込んで瞳を閉じた。用事があるのならまた来るだろうし。

「ナオ？」

ふっと気がつくのと、すぐ目と鼻の先に葵の心配そうな顔があった。「大丈夫？ 先に帰っちゃうくらい、調子悪かったの？」

「……別に」

まさか君が誰かとキスをしていたのを見て狼狽して先に帰ったとは言えない。僕はぶっきらぼうにそう言って、ごろりと葵に背を向けた。

「ホントに、平気？ 調子悪いんだったら、ママ、呼ぶよ？」

「ダイジョブ。ただちよっと眠いだけ」

「ね、眼鏡作りに行かないとね」

「あ、そうだ。忘れてた」

この間チンピラに絡まれたときに、メガネは使い物にならないくらい壊れてしまったのだ。眼鏡屋に行かないと、と思いながら忙しさに取り紛れて忘れていた。最初のうちこそ違和感があったものの、別にないと困るものではないのでつい忘れてしまう。

「でも、まあいいや。眼鏡なくても困らない……」

「だめ！」

葵が素早く言った。

「何で？ そんなに僕、悪人面？」

「違うの……」

葵が小さな声で否定した。

「白状するわよ。ナオは悪人面じゃない」

「はあっ？」

「いや、むしろナオはカッコいいよ」

「また、冗談を……」

「昔つからナオは老若男女を問わずもてたから。私、心配だったの。誰かが私の目の前でナオを連れ去っていかないか」

「……。僕が葵の言うことをほいほい聞く、便利な奴だったから？」

「……」
葵はそれには応えないで疲れたような顔でため息をついてから、くるりと表情を変えた。

「お願いします、直己様！ 明日提出の数学の問題集の答え、写させて」

「……」

「明日までに二十ページも終わらないよお」
泣き声で言う葵に、僕はため息をついた。葵はしばしばこうやって、宿題をためこんで泣きついてくる。

「自業自得」

首を動かして葵の方へ向けた。

「溜め込むと後で苦労するよって、いつも言ってるじゃん」
「お願い、ナオキ様」

目を少女マンガの主人公のようにウルウルさせる、葵に僕は自分でも思ってもみなかったことを口走った。

「カレシに写させてもらえば？」

俺の一言に葵の顔がさっと赤くなった。

「なん、何で知ってるのよ？」

「いやま、ちよつとね」

まさか見てましたとは言えない。

「青少年の健全なお付き合いをしてね」

葵から顔を背けて、再び彼女に背を向けて僕はひらひらと手を振った。

「私に彼氏がいるって知ってたさ。……ナオは」

背中にコツンと葵の頭が当たるのを感じた。

「ねえ、ナオは何にも感じないわけ？」

葵はそう言い捨てるのと逃げるように去っていった。今はとがめる気にもならなかったが、彼女の手にはしっかりと僕の問題集用のノートがあった。床に転がしておいた僕の鞆の中から勝手に取ったらしい。

ボタンと玄関のドアが閉まる音がしてからも、僕は口元に手をやったまま真っ赤になって固まっていた。

耳に葵の声が蘇る。

ナオは何にも感じないわけ？

感じないわけ、ないじゃん。感じたから葵を置いて帰ってきたんだよ。

この気持ちを何て言えばいいんだろう？

突然、窓の外から音程の外れた歌声が聞こえてきた。耳を覆いたくなるようなヒドイ調子だけど、不思議とシアワセな気持ちになる。誰が歌っているのかと思っつてそつと窓に近寄つて外を覗くと、葵に心を『修復して』もらった山中さんが幸せそうな表情で歩いていた。何があったのかはわからないけれど、いいことがあったらしい。ソファに戻つて横たわっていると、ふと山中さんのボロボロになった心とこの間見た、チンピラのボロボロの心をふつと思ひ出す。

「心、か……」

心一つで人は死にたくもなるし、殺してやりたいと思う。一方で幸せを感じ、この人の笑顔を見たいと思う。

僕は人の心をいじれる。でも今日はつきりと悟った。僕は自分の心も、幼馴染の心もよくわかっていない。そんな奴がこのまま何の訓練も受けずにいていいのだろうか。

(このままでいいのかな……?)

そんな不安を抱えながら、僕はいつしか眠りに落ちて行った。

「直己？」

目が覚めるとすぐそこに父さんの顔があった。相変わらずいい男だ。

「父さん」

「どうした？ 大丈夫か」

僕はソファーから身を起こして、父さんが逃げないように洋服を

掴んで宣言した。

「アメリカ、行く。行きたい」

「……いいのか？ 中学卒業と共に、アメリカ（あっち）に移って、何年か帰って来れないんだぞ」

「うん、いいよ」

僕はしっかりと頷いた。

「行く」

「……」

父さんはまるで僕の言葉には続きがあるのをわかっているように、辛抱強く待ってくれた。

「……このままだと気持ちが悪いから。自分の気持ちすらよくわからないけど、このまま悶々としていても何にも始まらないから。それにこんな力を持っていながら野放しにしておくのは危ない気がするんだ」

「ああ、そうだな。俺も、同じ意見だよ」

「……」

父さんに宣言してしまった。これでよかったのだろうか？ 僕は正しい選択をしたのだろうか？ 僕の不安を見透かしたように、にこりと笑って父さんはかがみ込んで僕と視線を合わせた。

「直己。行けるトコまでで、いいじゃん。一緒に行けるところまで行ってみよう」

父さんは力強く僕を抱きしめた。

「心配すんな。俺達なら大丈夫だよ。俺たちには、夏鈴かあさんがついてるじゃないか」

「ああ……。そうだね、母さんがついてるもんね。何かあったら、木刀を片手に助けに来てくれるね」

僕がいじめっ子にいじめられるたびに、嬉しそうに木刀を手にしていた母さんを思い出す。

「それに大丈夫さ。食うに困ったら日本こゝに戻ってきてホストクラブを開けばいい」

まだそんなことを考えていたのか、この親父は。

+++

「納得できない！」

僕たちのアメリカ行きに地団駄踏んで一番、反対したのは葵だった。

「そんなことを言われても……」

僕はゴジラと化した葵を扱いかねて困りきった。何があったのかと目を丸くする通行人の視線もかなり恥ずかしい。

「アメリカなんて巨人の国に行ったら、小人のナオなんて目に入らなくて踏み潰されちゃうんだから！」

「そこまで小さくないつもりなんだけど……」

「それは認識不足ってもんよ。大体、どうして私に相談なくそういうこと、決めちゃうわけっ！」

泣き叫ばばかりの葵を見るに見かねて、弥生さんがたしなめた。「葵。空港のロビーでみっともないからやめなさい」

「だって、ママあ」

目に涙を浮かべて葵は弥生さんの胸に飛び込んだ。

「いやあね、もうすぐ高校生だって言うのに子どもっぽいんだからやれやれとため息をついて天を仰ぐ弥生さんに、僕は声をかけた。

「弥生さん……。あの、今までホントお世話になりました。ありがとうございます」

「あら、嫌ねえ」

深々と頭を下げる僕に、弥生さんがおっとり微笑んだ。

「直己君はあたしの息子よ。嫌になったら、いつでもすぐに戻っていらっしやい」

やっぱり、弥生さんは大物だ。さすがに僕の初恋の人だけある。

感動して、僕はそう思った

「ナオ。そろそろ行こう」

チケットを手にした父さんが、僕を呼ぶ。

「え〜ん、ナオなんて一生帰って来ないんでしょ!」

「いや、帰ってくるよ」

「ウソだ、絶対!」

「……葵、ちよつとこっちに来いよ」

一つため息をついて、弥生さんの胸の中で泣きまねをする葵を呼び寄せる。

「ちよつとお借りします」

「どうぞどうぞ。こんなのでよければ」

弥生さんの許可を得て、葵を引き寄せる。

「葵。絶対に帰ってくるから……」

僕は葵の顔を改めて見つめた。

生まれたときからいつも一緒に、この思えばまじまじと彼女の顔を見たことはなかったかもしれない。

僕はそつと葵の頬を撫でた。弥生さんに似た大きな瞳も僕を食い入るようにつめて見ている。互いに相手の顔を良く覚えておこうとしているようだ。

「僕が帰ってくるまで待つて欲しい」と言いたいのを僕は必死にこらえて、僕は冗談めかして言った。

「大丈夫、待つてとは言わないよ。いつ帰ってくるかわからないからね」

「何、言ってるの? ナオはいつもゆっくりだから待つのは十八番よ?」

「うそ臭いなあ。大体、葵はカレシいるじゃん?」

「もう分かれたわよ!」

赤くなつて葵が即座に言った。

「あらら、分かれたの?」

「そうよ。だつて……ナオはちつとも私の気持ちに気がついてくれないんだもん。あんたが私に『彼氏がいるじゃないか』って言ったときは付き合つて既に三ヶ月目だったのよ!」

ちよつと焦つてもらいたかつたのに全然気づいてもらえなくつて、

ちよつと焦つたんだから！ とむくれる葵に、僕は苦笑した。

「でもまんざらでもなかったんだろ。そのままキープしておけばよかったのに」

僕の言葉に葵は重いため息をついた。

「わかつたの。私がそばにいたいのはナオのそばだけ。ナオ以外の人のそばにはいたくない」

「何もこんな別れ際にわからなくてもよかつたのに」

「私もそう思う」

「じゃあ、待っててよ。僕が帰ってくるの」

僕は葵の持ってた帽子を取り上げて、さりげなく横から葵の顔が隠れるくらいに持ち上げた。

「うん、待ってる」

「よし、じゃあ約束ね」

にやりと笑つてから、僕は葵の唇に軽くつえばむようなキスをした。

「僕はきつと帰ってくるって、このファーストキスにかけて誓うよ」
自分の唇にそつと人差し指を当てて誓う。

「じゃ、行ってくるから」

目と口をO型にする葵に笑いかけて、僕は少し離れたところで待っている父さんのところに駆け寄つた。

「わが息子ながら、未恐ろしい奴……。やっぱり将来はホストを開こうか？」

父さんの言葉は聞こえなかったふりをして僕はニコニコと笑顔で手を振る弥生さんに会釈をした。

「行こう」

「うん」

僕たちはそろって歩み出した。後ろは振り返らなかった。

+++

「もう、無理……。契約、取りすぎだよ」

所属モデル事務所で、あたしはマネージャーのよこしたスケジュール表を見てぶつつぶれた。

あたしは高校のときにスカウトされてモデルになった。小遣い稼ぎができればいいやと思つて始めた仕事だ、いつの間にか今では本業になっていた。

「やめてよ、アオイちゃん。あなたは日本きつてのモデルなのよ！日本の女の子の憧れなのよ！いつも誰かがあなたのことをみているのよ！常に清く正しく美しく！」

今年からあたしのマネージャーになった人はやたらめつたら鼻息が荒い。

「モデルの前に、あたしは一人の人間なのよ！人格を認める！休日を寄せ！」

「だめよ！あなたのことを、皆が待っているのよ！」
「何も聞こえない！」

マネージャーの言葉に文字通り耳をふさぎ、あたしは椅子から立ち上がつて外へと逃げ出した。追つてこられると面倒なので、一応「お茶買つてくるだけだから」と言い添える

ヒールをガタンガタンいわせて階段を降りたところであたしは人と正面衝突した。

「あ、すみません」
「こちらこそ」

ぶつめた鼻を押さえて、あたしが反射的に謝ると相手も落ち着いた声で応じた。男性特有の深みのある、艶やかな声音に誘われるようにあたしは視線をあげた。

(うつわ)

この業界に入ってから嫌というほどみてきた美系より、更にきれいな男性だ。髪は茶色っぽいさらさらで、やや目じりが上がっている。それでもそこが更に彼のクールさを際立たせていた。その男の人は、身長百六十八で今日は高めのヒールをはいているあたしを上から食い入るように見下ろしている。何だかとても居心地が悪い。

「相変わらずのようだね、葵」

男がふいに顔を緩ませて親しげに声をかけてくるが、あたしにはサッパリ記憶がない。誰だっけ？

「ってか、日本のファッション界も終わりだな。葵みたいのがトッブモデルを張っているようじゃ」

「御用は？」

少々むっとしてあたしはつつけんどんに尋ねた。サインなら、お前なんかじゃ、やらねえよ。

「弥生さんに居場所を聞いたら、ここだろうって言われたんだ。ついでに差し入れを渡してって言われた」

男は手にした袋を軽く持ち上げた。

「ママから？」

目を丸くするあたしに、その男は軽く笑った。

「まだ思い出せない？ あ、メガネかけてないからか？」

「メガネ……？」

ボンヤリと、何の相談もなしにとっとアメリカに行ってしまった幼馴染の顔を思い出す。穴の開くほど男を見つめていると、男は片目を瞑って軽く自らの唇を二、三回叩いた。

「忘れた？」

猛烈な勢いで記憶のテープが巻き戻される。映像ではなく、軽くついでむようなキスの感覚が蘇る。

「……」

顔がかあつと赤くなる。男はその反応を見て彼が誰なのか、あたしが思い出したと悟ったらしい。

憎たらしくなるくらいきれいな笑みを浮かべて、両手を開いた。

「ただいま、葵」

あたしは「お帰り」の言葉の代わりにタツクルするくらいの勢いで彼の胸の中に飛び込んだ。

「うわ！」

驚きの声を上げながら、がっしりとした体はあたしの突進にびく

ともしない。

ふわり鼻をくすぐる香りが、あのキスのときと同じで嬉しくなる。今更ながら、自分が彼をずっと待っていたのに気がついた。

「葵……」

そつとあたしのあごを持ち上げる。瞳が合つと彼はとろける様な笑みを浮かべた。

「……」

「相変わらず、イノシシみたい……ぐっ！」

あたしはにっこりと商売用の微笑を浮かべて、相手の弁慶の泣き所を細いヒールで蹴り上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690g/>

心の『修復』賜ります！

2010年10月8日15時31分発行